

「固有 ID」によるドメイン認証

1. 管理画面「E/U 申請情報確認 1」“ドメインの利用権限確認の認証方法の選択” コーナーにおいて、**(b)** を選択しないでください。

ドメインの利用権限の認証方法の選択 (ドメインの利用権限についてはこちら)

証明書毎に米国認証局によりアサインされる固有IDを、お客様のWeb pageやDNSに一時的に設定頂く (設定方法についてはこちら) ことで、お客様の申請ドメインの利用権限を認証します。

上記固有IDによる認証を希望されない場合は、次の認証メールによる方法 “b” を選択してください。

a. 申請ドメインのベースドメイン名で検索できるWHOIS公開アドレス

JPRS WHOIS (.jpドメイン)
Go Daddy WHOIS (その他ドメイン)

「EU一般データ保護規則」によりWHOIS公開アドレスが
利用不可となりました。(詳しくはこちら)

【注】こちらを選択するには、WHOIS情報を公開することが必要です。
(ドメイン管理ベンダが提供する情報プロテクションサービスは一時的に解除してください)

b. 次の5つのメールアドレスへの一括同報 (一部アドレスの選択は不可)

admin@ (ベースドメイン名)、administrator@ (ベースドメイン名)、webmaster@ (ベースドメイン名)、
hostmaster@ (ベースドメイン名)、postmaster@ (ベースドメイン名) (詳細はこちら)

⚠ マルチドメイン証明書においては、付帯ドメイン個別に認証方法を区別して選択することはできません。

2. 固有 ID は、申請毎米国認証局により割当てられ、別途「ドメインコントロール検証が必要です」なる件名のメールにてご連絡致します。
(注) マルチドメイン証明書では収容されるすべてドメインに対しては **1つ** の「固有 ID」を共有します。

【代替策 1 : DNS レコード認証】

・ **EV SSL** はこの代替策はご利用頂けません。

- ・ 「ベースドメイン (Naked Domain)」の DNS 設定に「TXT レコード」を追加頂くことでドメイン利用権限の認証を行います。
- 「ベースドメイン」とは、例えば証明書発行先 FQDN が **xyz.abc.example.com** の場合ですと、**“example.com”** が **WHOIS** での登録最少単位 となります。

・この方法は、「Domain Zone Control」と呼び、証明書発行先 FQDN の「利用権限」を有していることの証として、当該 FQDN の「ベースドメイン」の DNS 上で「TXT レコード」として弊社が指定する「固有 ID」を追加頂くことで検証いたします。

・「TXTレコード」はドメイン所有/利用権限の有無を確実に検証するためのツールであり、**Google Apps** 利用開始時等の本人確認手段として広く利用されて来ており、「TXTレコード」を追加しても、現在のメールフローが中断されたり、他の既存のサービスに影響を及ぼしたりすることはありませんのでご安心ください：

- ご使用の「ベースドメイン」のドメインプロバイダ（挿絵事例は、お名前.com 様事例となります）の管理コンソールにログインします。

- 「ドメイン」の DNS レコードを更新できるページを探します。（DNS 管理、ネームサーバー管理、詳細設定といったようなメニューとなっております。）



- ドメインの TXT レコードを探し、以下事例（お名前.com の設定画面）に倣い、それぞれのドメインプロバイダの管理コンソール上で「TXT レコード」を追加してください。

● 入力

ホスト名	TYPE	TTL	VALUE	優先	状態	追加
jcrt.jp	TXT	300	cito83H		有効	追加

1. ホスト名：何も設定しないでください！ TYPE: **TXT**
2. TTL (Time to Live:設定完了までの秒数) :**300**
3. VALUE:弊社より指定する「固有 ID」（cito83H は事例における見本です）

バリュードメイン設定事例：

<https://www.value-domain.com/info.php?action=press&no=20050901-1>

ムームードメイン設定事例：

https://muumuu-domain.com/?mode=guide&state=custom_setup

スタードメイン設定事例：

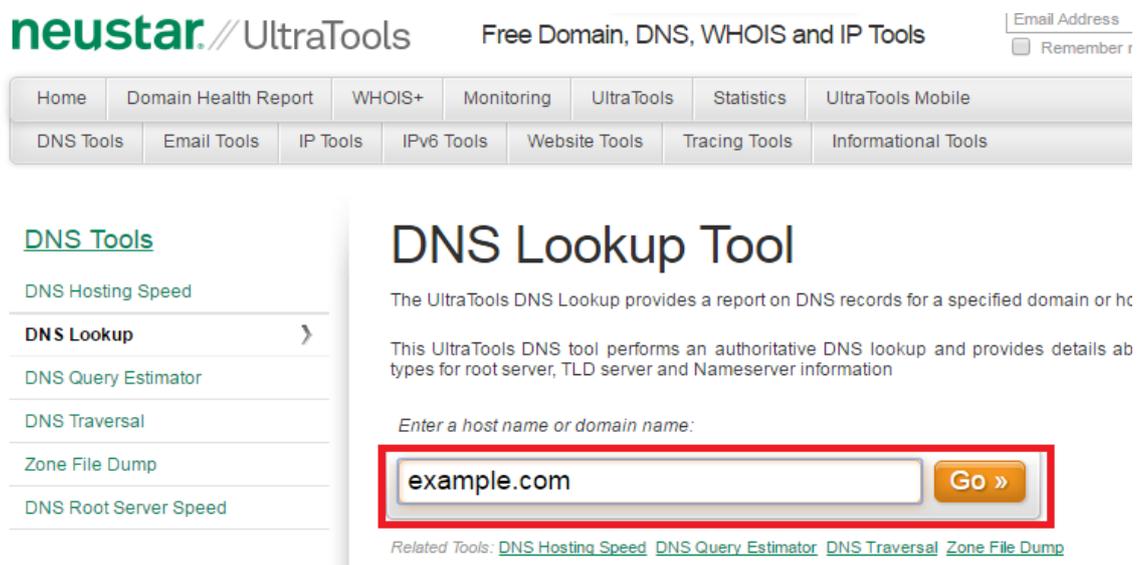
http://www.star-domain.jp/man/man_dns_setting.php

(注) **DNS** によっては、

- ホスト名は、明示的に「なし=@指定」にする
- 認証コードは "" (ダブルクォーテーション、**example.com IN TXT "cito83H"**) で括くらないと登録できないものがあります。詳しくは、それぞれの **DNS** 提供ベンダにお問い合わせください。

- 作成後の設定内容については、**Web** 検索でヒットする各種 **TXT record lookup** ツールにて容易に確認頂けます。

<https://www.ultratools.com/tools/dnsLookup>



TXT		
IN	"v=spf1 +ip4:202.245.1.24 ~all"	
IN	"6Thk9Dx"	
	"google-site-verification: xMECaIFMdpCuH-zKeWarCvTWGA4JUBmW9M3YSM03ZI"	
IN	"tqv057kv200nk53fqojk69meb"	

【代替策 2 : Webpage 認証】

- ・ **ワイルドカードはこの代替策はご利用頂けません。**
- ・ Webpage によるドメイン利用権限の認証を行います。
- ・ この方法は、「Webpage Control Validation」と呼び、証明書発行先 FQDN の「利用権限」を有していることの証として、**当該 FQDN の配下に以下のディレクトリにて構成された URL に 認証ファイル を新規作成頂くことで検証いたします (当該 URL は弊社からメールにてご案内しますので、そちらをご活用下さい) :**

- URL は、http or https いずれでも OK です。

<http://申請 FQDN/.well-known/pki-validation/starfield.html>

<https://申請 FQDN/.well-known/pki-validation/starfield.html>

【注】申請 FQDN が www.example.com の場合には、**www** を除いた **example.com** にて **URL** を設定してください。(**www** 以外のサブドメインの場合はこの限りではありません)

- さらに、**当該ページは白紙ではなく、申請毎に割り当てられて「固有 ID」を記載**
- **リダイレクト先に認証ファイルを置かず、当該 URL 直下に設定してください。**
- ・ 以下はサンプル事例となりますので、ご参照ください。

(この事例では、「固有 ID」は、**Yn74554z** が**見本**として設定されていますが、実際には申請都度米国認証局から割当てられる「固有 ID」をメールでご連絡します。)



以上